

川通掛高木家の川通巡見 — 天保五年を事例として

River patrol by the Takagi familys

名古屋大学大学院人文学研究科
Nagoya University Graduate School of Humanities

石 川 寛
ISHIKAWA, Hiroshi

Abstract

In the Kiso Three Rivers basin in the early modern period, the Takagi familys, who was the Hatamoto, played a major role in river management. In this paper, taking 1834 as an example, we examined river patrols by the Takagi familys and clarified the specific contents of the river management system.

Keywords

Takagi Family Documents (高木家文書), The House of Takagi under direct retainer of the shogun (旗本高木家), flood control (治水), The Kiso Three Rivers (木曾三川)

はじめに

近世の木曾三川流域においては、旗本であった高木家（西・東・北の三家からなる）が、美濃郡代（笠松代官）と共に河川管理の役割を担ったことが大きな特徴となっている。

元禄十六（一七〇三）年の桑名川通（伊尾川下流）を対象とした取払普請、宝永元（一七〇四）年の美濃国中の河川を対象とした大規模な取払普請——いわゆる「宝永の大取払」の後、幕府は取払後の河川状態を維持するため、高木三家に対し年番で川通を巡見することを命じた。これ以降、高木三家は川通掛（もしくは水行奉行と呼ばれる）として、笠松代官方と共に毎年取払跡の川筋を巡見して水行の障害の有無を見分し、また現状変更や新規普請の願いに対しては両者が立会でその可否を判断した。このため高木家は、流域住民から、陣屋の所在地（多良郷宮村）にちなんで、「多良御役所」や「多良御奉行所」と呼ばれた。

元禄・宝永の取払普請は、洪水の原因を河道の狭隘化にあるとして、川通の障害物を除去することで水行条件を改善し、川水を速やかに海へ流下させること意図したものであった。それゆえ幕府の治水政策が、それまでの復旧工事中心から、水害予防へ重点を移したと評価されている。そして高木家の川通掛就任は恒常的な河川管理体制の創設と位置づけられている⁽¹⁾。

木曾三川流域史では、このように一八世紀初頭を一つの画期としながらも、その後の関心は延享・宝暦の手伝普請へと向かうため、このとき創設された河川管理体制がどのように機能し展開したのかについては十分には検討されてこなかった。そこで本稿では、高木三家と笠松代官方による河川管理体制の実態を明らかにする作業の手始めとして、比較的資料が残っている天保五（一八三四）年の川通巡見を取り上げ、その具体的過程と内容について検討する。

一 川通巡見の範囲

最初に高木家による川通巡見の範囲と権限について確認しておきたい。

宝永の大取払を終えた宝永二（一七〇五）年四月五日、予防的見地に立った治水政策を常態化するため、老中土屋相模守政直は高木五郎左衛門（西家）、高木次郎兵衛（北家）、高木富次郎（東家）に対し次のように川通巡見を命じた⁽²⁾。

今度濃州川筋新田築出竹木等取払候間、向後川通江各三人壹ヶ年代家来指出之、水行障り二成候儀不仕様可被申付候、委細従御勘定奉行中可達候条可被相談候、恐々謹言

高木三家へ一ヶ年代で家来を取払跡の川通へ派遣し、水の流れに支障がないよう取り締まることを命じたのである。これは宝永の大取払を献策した美濃郡代辻六郎左衛門守参の構想に基づくものであった⁽³⁾。辻は、取払普請の上は今後「川通之奉行」なりとも仰せ付け、川上より船で巡り海口まで見分させ、水行の障りが少しでもあれば直ちに取払うよう村々へ命じれば、水行も改善し、濃州の大水損はなくなるかと献策していた。先の老中奉書は、この「川通之奉行」を実現するものであった。

老中奉書を受けて高木三家は自らの権限について勘定奉行所に指示を仰いだところ、五月に付紙による回答があった⁽⁴⁾。それによると巡見の範囲は、美濃国の川筋で取払をおこなった場所および伊勢国桑名川通（伊尾川下流）、尾張国熱田川通（木曾川下流）までを範囲とした。当初は木曾・長良・伊尾の三大河川はもとより、美濃国中の小河川も巡見の対象としていたのである。

川通巡見は年番の家の家臣が二人ずつあたることになっていた。このため高木三家は、河川管理を担当する常置の役として川通役を置いた。川通役は、見習が付くこともあったが、原則それぞれの家から一人が選ばれた。また、美濃郡代が指揮する笠松陣屋には、治水担当の

堤方役が置かれており、高木家の川通役と連携して河川管理を担った。ところが、明和三（一七六六）年以降、高木家の持ち場は縮小されてしまふ。十一月に大目付より渡された老中松平右近将監の書付には次のようにあった⁽⁵⁾。

濃州勢州尾州御料私領川除普請所水行之儀ニ付是迄美濃郡代江立合被致候処、向後者濃州勢州之内木曾川通・長良川通・伊尾川通右三川之分者御料私領共美濃郡代江立合是迄之通相心得、右之外小川之分者立合不及候、向後水行立合ヶ所別紙之通可被相心得候十一月
右之通可被相達候

濃州笠松村方加路戸川通海口迄

木曾川通

濃州河渡村方成戸川木曾川落合迄

長良川通

濃州西結村方勢州桑名川通海口迄

伊尾川通

右三川計美濃郡代江立合是迄之通可被心得候

すなわち、木曾川は笠松村から加路戸川通海口まで、長良川は河渡村から木曾川との合流地点まで、伊尾川は西結村から桑名川通海口までを高木家は美濃郡代と共に管理することになり、美濃国上流部と小河川は管轄外となった。高木家はその後持ち場の復活を目指して運動を繰り広げるが、いったん縮小された持ち場が元に戻ることはなかった⁽⁶⁾。したがって本稿で検討する天保五年はこの縮小された範囲になる。

二 川通巡見に向けて

川通巡見は、毎年次のような手順で実施された。①高木三家・笠松代官方より川筋の村々に対して、水行の妨げになる障害物の取払を命

じる。②村々が取払を実施し、取払済み注進をおこなう。③その点検のため高木家川通役と笠松代官堤方役が見分のため廻村し、取払が不十分な箇所があれば村々に撤去を命じる。④取払が確認されたら庄屋や惣代が請印帳に押印する。

この具体的過程と内容を明らかにするため、天保五年の川通巡見を取り上げる⁽⁷⁾。

天保五年の各家の川通役は、西家が三和六左衛門義故、東家が川添本務重基、北家が加藤加藤太重右である。年番は子・卯・午・酉が西家、丑・辰・未・戌が北家、寅・巳・申・亥が東家と定められていた。天保五年は甲午なので西家の三和が年番であった。三和は文政五（二八二二）年に見習となり、病気で退いた伊東幾右衛門に代わって天保二年から本役をつとめていた⁽⁸⁾。

当初は川通役が二人ずつ巡見にあたっていたが、明和三年の持ち場の縮小に伴い一人が廻村する方法となった。ただし、見習が同道することもあった。過去には安永七（一七七八）年に加藤要蔵（北家）、文化八（一八一）年に加藤貢（北家）、文政七（一八二四）年に三和四郎太夫（西家）が見習として出役しており、この先天保八（一八三七）年にも見習の小寺勘兵衛（西家）が三和六左衛門に同道する⁽⁹⁾。

天保五年の笠松代官堤方役は、水野郡右衛門、棚橋瀬十郎、森川春右衛門、名和茂利右衛門、戸沢助太夫、原田弥右衛門、横井兵八郎、野々村三郎右衛門、田中三津次、赤生伝次郎、中嶋恵之助、右田又太郎、水野桂之丞、名和重之助の十四人であり、この年は田中三津次が担当であった。

七月二十六日、川通役三人から堤方役の水野郡右衛門・棚橋瀬十郎へ、大川通取払場立会見分改の日程について打診があった。これを受けて堤方役の田中は、村々へ取払を命じる廻状案を作成し、九月十日に川通役の三和へ送った。三和は廻状案を確認した上で日付を書き入れ押印し、十二日に村々へ順達した。

廻状は二通作成された。一通は福東村から上流の伊尾川・長良川沿いの村々六五ヶ村を、もう一通は船付村から下流の一七四ヶ村を廻つて、どちらも今尾村まで順達された。その内容は次の通りである。

其村々宝永年中川通水行障二相成取払被

仰付候場所、近年川通之規矩致忘却都而取払方不行届川方野方江致差木水行害二相成村々茂有之、精々申触候得共不行届不埒之至二候、当月廿五日迄二取払、多良・笠松御役所江注進可申出候、追而廻村之節、去ル寛政二戌年・享和三亥年相改候絵図面を以巨細致吟味、不行届村々茂有之候得者致場所附為取払可申候条心得違無之、宝永年中取払場外二候共当時水行害二相成候場所、右日限迄二急度無相違取払置可申候、此廻状村下致印形、昼夜二不限刻付を以順達於留村我等罷越候節可被相返候、以上

宝永の大取払を基準に水行の障りとなるものを九月二十五日を期限に取り払い、多良・笠松両役所へ注進することを命じている。

また、寛政二（一七九〇）・享和三（一八〇三）年に改絵図を作成していたことがわかる。このうち寛政二年の伊尾川通・長良川通の改絵図が東高木家治水文書に伝わっている¹⁰⁾。元は笠松役所が所持していたものを、文化七（一八一〇）年の巡見中に川通役小寺牧太が堤方役に掛け合い、以後多良奉行所に預け置くことになったものである。改絵図には、川通に存在する畑や砂場・猿尾などが詳細に描かれ、幅印として朱線を引き、堤から堤までの川幅、その間の水が流れる幅（水通）の計測結果が記録されている。この改絵図と取払場所を照合して、取払が不十分な村があれば取り払わせ、水が滞りなく流れるよう川幅を一定に保ったのである。なお、改絵図は天保十（一八三九）年にも作成されるので、それ以降の廻状の文言は「寛政二戌年・享和三亥年・天保十亥年相改候絵図面を以」となる。

この廻状を受けて川筋の村々では取払を実施した。「大川通宝永年中御取払場取払注進扣¹¹⁾」によると、取払済み注進書は九月十八日から届けられている。注進書は単村で届け出るものと、沿岸の数ヶ村が連名で届け出るものとに分かれる¹²⁾。

このとき中島郡須賀村のみ注進がなかった。このため三和は、後述する旅宿先の福束村に須賀村役人を呼び出し、理由を問い糾している。出頭した須賀村庄屋代長十郎と年寄友八が弁明するには、取払は期日までに済ませていたものの、庄屋甚左衛門が病死したため、未注

進に気がつかなかったという。三和は引き継ぎに問題があったとして厳しく「呵り」、改めて注進書を提出させた。

須賀村以外の注進書がそろった段階で、三和と田中は出役日時の調整をおこない、福束村を起点として十月十七日に集合することにした。出役が少々延引したのは、多芸輪中より津屋川口築流堤普請の出願があり、その処理のため三和らが出張りしたためである。

十月十七日、三和は朝六ツ半時に多良を出立、八ツ半時頃に福束村に到着した。三和は福束村で田中と落ち合い、明日からの見分を伝える先触を作成し、村々へ廻村の順序を伝えると共に案内や船人足・休泊所の支度を命じた。先触も二通作成され、福束村と横曽根村からそれぞれ順達された。

覚

一人足九人

内

駕籠式挺 六人

分持式荷 貳人

合羽籠壱荷 壱人

右者先達而相触候通川通取払場見分為改我等共左之廻村順之通致廻村候間村境江出迎案内可有之候、尤村々申合船人足差出可被申候、且於休泊御定之木綿茶代相払候間上下六人之支度用意可被致候

一請印申付候間休泊之内最寄村へ庄屋印形持参可有之候、此先触刻付を以早々順達於留り村我等共着之上可被相返候、以上

高木修理内

午十月十七日

三和六左衛門印

酉上刻出ス

堤方役

田中三津次印

刻印

十月十八日辰ノ上刻

刻印

十月十八日辰ノ上刻

福束村出立

福束村出立

福束村		横曽根村
南波村	三	川口村
中須村		嶋村
大明神村	𠂔	今福村
北今ヶ渚村		難波野村
西結村	𠂔	牧村
泊		休
上開発村		平村
		直江村
		大村
	三	三本木村
		万石村
	𠂔	波須村
		佐渡村
	𠂔	下開発村
		同新田
		津村
	旅宿式軒 用意	泊
		上開発村

〔以下略〕

先触はこのように川を挟んだ形で左岸・右岸の村々が示されていた。巡見は基本、乗船にして目視でおこなわれ、そのため村々に船人足の提供を求めていた。また、確認後は庄屋や惣代が請印帳に押印しなければならなかったため、最寄の休泊所に印形持参で出頭することを命じている。

三 天保五年の川通巡見

十月十八日早朝、出頭した須賀村役人への「呵り」を済ませた後、三和と田中は巡見に出立した。以下、日を逐って巡見の内容をみていくことにする。経路については巡見経路図を参照してもらいたい⁽¹³⁾。

初日の十八日は五ツ時頃に福束村を出立、牧田川の合流地点から伊尾川を船で北上した。左岸は福束村・南波村・中須村・大明神村・北

今ヶ渚村・西結村、右岸は横曽根村・川口村・嶋村・今福村・難波野村・牧村・平村・直江村・大村・三本木村・万石村・波須村・佐渡村・下開発村・下開発新田・津村・上開発村の取払跡を見分し、嶋村の新規並杭、難波野村・南波村・牧村の取払残、西結村の新規作付・柳藪取払残について直ちに取払させた。夕七ツ半時頃に津村に到着、当初の上開発村泊が変更となり、この日は隣村の津村泊となった。

十九日は辰上刻に津村を出立し、駕籠で河渡宿へ向かい、四ツ時過ぎに到着した。そこから加納藩より手配の御馳走船で木曽川を下った。左岸は江崎村から東小熊村まで、右岸は河渡村から森部村までを見分した。河渡村船渡場下の竹木不取払、江崎村堤外の新規小家一軒、河渡村堤添の小家一軒、前野村の不取払および新規作付、下奈良村の取払残、上穂積村・下穂積村中洲の作付、御茶屋新田の取払残について取払を命じ、暮六ツ時頃に宿所の森部村に到着した。

二十日も長良川を、木曽川合流地点まで南下した。辰下刻に森部村を出立し、左岸は天王森村から桑原輪中南端の小藪村まで、右岸は大森村から高須輪中の成戸村までを見分した。本郷村・須賀村・堀津村に不取払、勝村・野寺村・東方村・大須村・野市場村・松之木村・瀬古村に少しづつ取払残があった。平方村は取払残が多く、それぞれ取払を申し付けた。小藪村では外畑作場道新規置土の分を取り払わせている。すべての見分が終わり成戸村に入ったのは夜になってからで、それから宿所の今尾まで陸路で向かい、夜五ツ時頃に到着した。

二十一日は辰上刻に今尾を出立する。伊尾川を左岸は今尾南の土倉村から油島新田、右岸は高柳新田から七郷輪中の上之郷村まで南下し、それから桑名川通を左岸は長島輪中の松之木村・上坂手村から大嶋村まで、右岸は南之郷村から福嶋村まで、および与左衛門新田草場・茂左衛門新田草場を見分し、大嶋村に宿泊した。上坂手村前からは長島藩より御馳走御座船が用意され、長島領庄屋惣代・殿名村十左衛門が同船して案内した。

この日は、伊尾川通では福岡村・駒野村・安田新田・安田村・東平賀村・七右衛門新田・万寿新田・金廻村・江内村・油島新田・古敷村・東福永村・上之郷村の取払残、桑名川通では南之郷村・今嶋村・

下深谷部村、長島領千倉村より下村々の取払残を取り払わせた。山崎村では切出石の積み残し分について察当をうけた庄屋甚蔵が十一月十日までに残らず積み出すことを約束した。

また、与左衛門新田・茂左衛門新田では新規作付がみつかった。この場所は長島領土取場入会であったので、桑名領惣代・上之輪新田庄屋平五郎と長島領惣代・大嶋村庄屋領左衛門を呼び出し問い糾したところ、桑名領よりの作付であることが判明した。三和・田中は、新規の儀は多良・笠松両役所に出願し指図を受けるべきであると平五郎の「心得違之段阿り」、早速明朝より取り払うよう申し付けた。他方で長島領千倉村地先にも新規作付があり、領左衛門へ取払を命じていた。私領内のことでも川通については高木家と笠松代官方が権限を有していたのである。

二十二日は辰上刻に大嶋村を出立、この日は桑名藩より御馳走小家形船が用意された。前日申し渡した与左衛門新田・茂左衛門新田および千倉村地先の新規作付の取払を指図した後、桑名御馳走船に乗船した。しかし猛烈な風のため赤須賀新田より歩行に切り替え、員弁川と桑名川河口の間に位置する一ノ新田（現在の桑名市福地）まで約一里半を徒歩で見分した。そこから桑名に戻り、この日は桑名に宿した。

二十三日は前日に指図した与左衛門新田・茂左衛門新田および千倉村地先の見分を済ませてから、葭ヶ須輪中の桑名川通沿い、横満蔵輪中、源緑輪中を見分し、松高新田を宿所とした⁽⁴⁾。

二十四日は辰上刻に松高新田を出立し、葭ヶ須輪中の福井新田亡所跡から順に加路戸川通を見分し、長地附新田・長地新田・葭ヶ須新田・近江島新田・大新田・加路戸新田の不取払の場所を取り払わせた。それから八ツ半頃に加路戸輪中を出立して木曽川を北上し、七ツ半時頃に立田輪中南端の船頭平村に到着した。先触ではこの日は下立田村まで見分し、それから対岸の金廻村で上陸して伊尾川右岸の大牧村に向かう予定であった。しかし、加路戸川通長島領村々などで不取払の場所が多く取り払わせたに時間がかかり、また船頭平村においても取払残や新規作付があったため、急遽船頭平村での止宿となった。

二十五日は辰上刻に船頭平村を出立、前日に取払を申し付けた場所を見分してから、福原新田・松田村・福原村・下立田村を巡り、取払

残が少々あったのでそれらを取り払わせた。金廻村を経て大牧村に到着したのは七ツ時過であった。

最終日の二十六日は辰上刻に大牧村を出立、伊尾川沿いを牧田川が合流する地点まで見分した。西海松村の不取払、根古地新田の藪柳、根古地村の取払残、塩喰村の柳および大野村・塩喰村・船付村の新規作付を取り払わせ、豊喰新田に旅宿した。

川通巡見はこの日まで計九日間の日程であった。翌日、田中と別れた三和は多良へ戻り、二十八日に出勤して復命し、また出役中の勘定書を提出した。

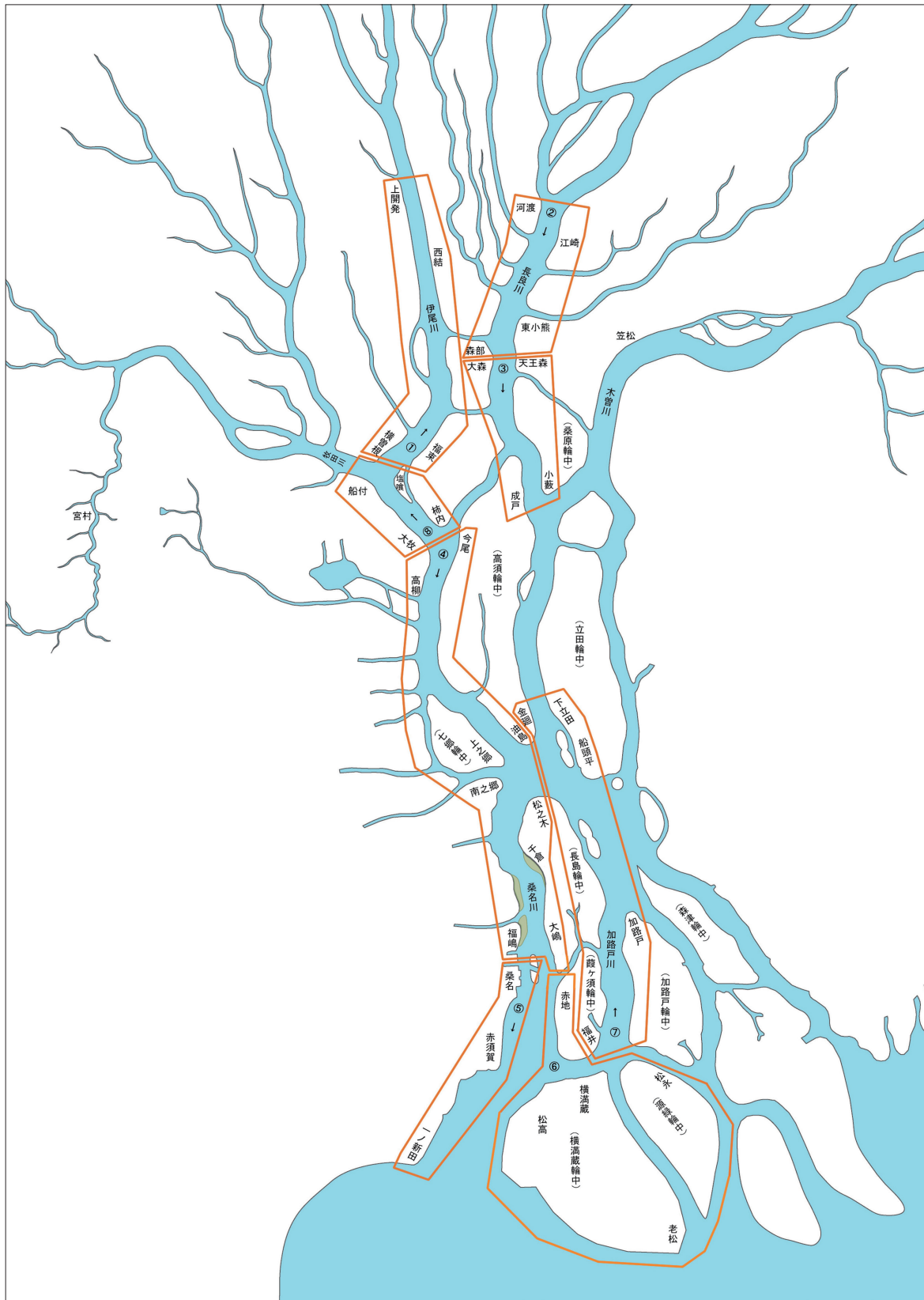
四 天保五年の普請見分

川通巡見においては、高木家川通役と笠松代官堤方役は、葭柳竹木などの取残分や不取払の場所があれば、厳しく申し付け、その場で直ちに取払わせた。また、新規作付や小屋も撤去させている。取払を確認した後は庄屋や惣代が請印帳に押印した。その請印帳には次のように記されていた⁽⁵⁾。

此度川通水行差障無之哉之段為御見分被成御廻村、私共御案内仕候通水行障二相成候儀無御座候、尤宝永年中御取払以後茂水行障二相成候場所者御吟味之上御取払被 仰付、猶又川通附寄地作物植付候儀并新規猿尾杭出其外共聊之儀茂百姓共心儘二仕候儀堅ク仕間鋪旨被 仰渡、右之趣急度相守罷在候、此上瀬向替り新規之堤川除不仕候而難成村々者、多良・笠松

御役所江御願申上、御差図通可仕候、聊之儀二而茂百姓心儘新規之儀決而仕間敷旨被 仰渡奉畏候、依之御請印形差上申処如件

宝永の大取払以後も水行障りの場所は吟味の上で取り払うこと、川通附寄地の作物植付ならびに新規猿尾杭出などは勝手におこなわないことを誓っている。また、瀬向替り（河川付替工事）や新規の堤川除をしなければ存続したい村々は多良・笠松両役所へ出願し、その指図に従うとしている。



川通巡見経路図

請書にあるように、川通掛としての高木家は、村々から普請の出願があれば、その都度現地を見分し、笠松代官方と立会でその可否を判断した。毎年の定期的な川通巡見で水行の障りを撤去し河道の状態を維持すると共に、その都度おこなわれる普請見分によって河道の変更を管理していたのである。そこで天保五年の普請見分の事例もここでみておきたい⁽⁴⁶⁾。

この年の三月九日、勢州油島新田地先締切六拾三ヶ村組合惣代が、昨夏の大雨で大破した喰違洗堰を自普請で修復したいと願い出た。このとき惣代は願書を多良役所と笠松役所へ提出すると共に、尾張藩親多須代官所および高須藩代官所の添状も持参した。一般の普請であれば領主の許可のみで済むが、河川関係の普請は領主の断りを得た上で多良・笠松両役所へ出願し、見分を受ける必要があった。

願書が提出されると、多良と笠松の間で立会見分の日時を調整した。このときは三月二十一日に七郷輪中の東平賀村で落ち合うこととなり、高木家からは川通役の三和六左衛門と加藤加藤太、笠松からは堤方役の原田弥右衛門と中嶋恵之助が出役した。四名は二十二日に船で現地へ出向き、出願箇所を見分した。

自普請の場合は見分の上、水行に差し障りがないと判断されれば、多良・笠松の権限で承認し、竣工後に出来形を見分するのを通例とした。

このときの普請は六月二十三日までに終わり、組合惣代から竣工届と自普請出来形書上帳が提出された⁽⁴⁷⁾。七月二日、川通役の加藤と川添本務、堤方役の原田・中島が出役して出来形を立会見分した。見分の後、計画通りに竣工したことを証明する「勢州桑名郡⁽⁴⁸⁾新田地先喰違洗堰自普請出来形帳」を作成し、堤方役と川通役が署判して組合惣代に交付した。

この普請は現状回復を目的とするものであったが、もう一件は現状変更の普請である。

四月二十三日、桑名郡海口惣代・松吉新田庄屋運平から猿尾補強の出願があった⁽⁴⁹⁾。桑名郡加稲山新開場の開発により水の流れに変化が生じ、桑名郡老松新田への水当たりが強くなったため、現在の猿尾を継ぎ足し五〇間とすることを計画したのである。

これを受けて川通役の三和・加藤、堤方役の水野郡右衛門・赤生伝次郎が五月六日に出役した。このときは現地を見分するだけでなく、長島領川西惣代、尾州領立田輪中惣代、森津輪中惣代、長島領川東惣代を呼び出し、障りの有無を問い糾して請書を徴収した。

水制設置など現状を変更する場合、その普請が周辺の輪中や村々に悪影響を及ぼさないか確認してから許可するか否かを判断した。治水は地域対立が伴うものであり、普請をめぐる地域の利害調整も川通掛高木家の重要な役割であった。

おわりに

木曾三川流域における河川管理体制の根幹をなす、旗本高木家による川通巡見について、その具体的な過程と内容を明らかにしてきた。今後は、持ち場縮小前の時期も含めて、事例を積み重ねていきたいが、その作業にあたって課題を挙げておきたい。

巡見経路を地図に示した経路図をみると尾張藩領の木曾川通は巡見経路から外れていたことがわかる。三日目は長良川通を木曾川合流地点まで南下し、そこから今尾へ向かった。また、八日目も下立田村まで北上した後、西進しており、長良川合流地点から伊尾川合流地点までの木曾川通は巡見していない。この経路は次の西家年番の天保八（一八三七）年も同じである。そこで改めて先に引用した明和三年の持ち場縮小の書付を見返してみると、別紙では木曾川通は笠松村以南となっているが、書付には「向後者濃州勢州之内」となっており、尾州は省かれていた。この問題を考えるとき、「木曾川河川管理における尾張藩の優越的地位は変わることなく維持された」という原昭午の指摘⁽⁵⁰⁾を改めて検討する必要がある。川通巡見のあり方、川通掛としての高木家の権限について考えていくとき、尾張藩との関係が一つの論点となる。

また、今回は天保五年を事例にみてきたが、こうした川通巡見のあり方は天保十（一八三九）年に改革の対象となる。すなわち、幕府勘定奉行より「水害薄らき方」すなわち水害軽減策の検討を指示された美濃郡代柴田善之丞によって「大川通御取払場見分出役方」（川通巡

見)の見直しが議論される²⁰⁾。改革時にはそれまでの問題点が浮き彫りとなる。多良・笠松の協働による河川管理体制においてどのような問題があったのか。今回、天保五年を選定したのは、天保十年以降との比較を念頭においてのことである。郡代による改革の内容とその後河川管理体制のあり方について次に検討していきたい。

(1) 注

- (1) 『木曾三川とその流域と河川技術』(建設省中部地方建設局、一九八八年)の第3章「高木家文書にみる水論と治水」(執筆は笹本正治、桐原千文)。『木曾三川流域誌』(建設省中部地方建設局、一九九二年)の第2部第3章「近世の治水」(執筆は原昭午)。伊藤孝幸「近世における木曾三川流域での治水」(『岐阜史学』八八、一九九五年)。秋山晶則「旗本交代寄合高木家の治水役儀をめぐって―笠松役所との関係を中心に―」(『名古屋大学博物館報告』一六、二〇〇一年)。
- (2) 高木家文書E・3・(1)・215。名古屋大学附属図書館所蔵。以下、請求記号のみを記す。
- (3) 「勢州桑名川通御訴状下書・同国川通之義辻六郎左衛門様御口上書写」(E・3・(1)・16)。
- (4) E・1・(1)・1。
- (5) E・1・(1)・2あゝい。
- (6) 前掲・秋山「旗本交代寄合高木家の治水役儀をめぐって」。
- (7) これ以降の記述・史料引用は、特に断らない限り、天保五年「川通御用日記」(E・3・(1)・3029)、「大川通御取払場立会見分中手扣」(同3043)による。
- (8) 三和については、鈴木雅「川通御用日記と三和六左衛門」(名古屋博物館『特別展 治水・震災・伊勢湾台風』、二〇一九年)も参照。
- (9) 天保八年「川通御用日記 壱番」(E・3・(1)・3159)。
- (10) 東高木家治水文書132・22・28(個人蔵)。
- (11) E・3・(1)・3031た。
- (12) E・3・(1)・3047あゝれ。

- (13) 巡見経路図の作成には服部亜由未氏の助力を得た。ここに記して謝意に代えたい。
- (14) 先触は泊を松永新田としていたが、実際には松高新田の庄屋宅を旅宿とした。
- (15) 「川通村々請印帳」(E・3・(1)・3031は)。
- (16) この章の記述・史料引用は、特に断らない限り、前掲・天保五年「川通御用日記」と「勢州油嶋新田地先洗堰自普請願一件」(E・3・(1)・3037)による。
- (17) E・3・(1)・3041ひ、れ。
- (18) E・3・(1)・2679う、え。
- (19) 前掲『木曾三川流域誌』二九〇ページ。
- (20) 「大川通御取払場見分出役方之儀当年改革御掛合御用留出役迄之日記」(E・3・(1)・3202)。

(付記) 本稿は科学研究費補助金・基盤研究(B)「木曾三川流域における治水関係文書の高活用に関する研究」(課題番号19H01306)による研究成果の一部である。